

# 最前線で働く30代女子

しているし、今後の人生もすごく楽しみ」と。彼女たちを支える熱い信念とは？ 撮影/白川由紀(土井さん、川西さん、塚本さん)、  
渋谷敦志(田辺さん) 取材・文/白川由紀

仕事は一見華やかに見えるかも。  
でも、心の中は“汗と涙の演歌調”。  
「ただ、人を助けたいだけなんです」

ヒューマン・ライツ・ウォッチ(NGO)東京ディレクター  
**土井香苗さん(34歳)**



エリトリアでの初めての  
ボランティア経験で  
自分の将来が決まった

大学3年生で司法試験に合格。米国で国際法を学ぶ……。肩書だけ見ると、近寄り難い存在。けれど少し遅れてやってきた土井さんは、「お化粧直してたら遅くなっちゃった。すみません」と、あくまで等身大のアラサー女性だった。彼女が属するヒューマン・ライツ・ウォッチ(HRW)は、NYに本部を持つ国際団体。「世界には人権をえ守られていない人たちが大勢います。記憶に新しいのは、ミャンマーの僧侶たちに軍事政権が発砲したという事件。私たちの仕事はそんな独裁・軍事国家に弾圧停止を促すことです」。きっかけは高校時代に読んだ『人間の大地』(大養道子)。「そこに描かれていた難民キャンプの様子が忘れられなくて」

その後21歳でアフリカの小国エリトリアでのボランティア活動。「ボランティアが大勢いると思っ

て行ったら私ともうひとりだけでびっくり(笑)。とにかく必死でした。当時独立したばかりで法律がないと知り、ならば私が、と思いい現地の法務大臣に直談判(笑)。なんと海外刑法の調査担当として受け入れてもらいました。ところが1年後彼女が出国した直後に内戦が始まり法律どころではなくなりました。争いのむなしさと自分のふがいなさで随分苦しんだという。「でもこの経験があったからこそ今の自分がある。エリトリア時代が私の原点です」

**History ビジネスヒストリー**

- 21歳** 司法試験に合格。直後、世界一周ピースポートに乗船し、エリトリアで1年間、法律づくりのボランティアに従事
- 23歳** 東京大学法学部卒業
- 25歳** 司法研修所修了後、弁護士として日本で難民弁護活動をスタートさせる
- 30歳** 人権問題をもっと追求したい、と思い立ち、国際法を学ぶためにアメリカへ
- 31歳** ニューヨーク大学修士課程修了。ちょうど、このころヒューマン・ライツ・ウォッチに出会う
- 32歳** 帰国後、東京オフィス開設のための資金集めを開始
- 33歳** ヒューマン・ライツ・ウォッチの東京オフィス開設。東京ディレクターに就任

エリトリアにてボランティア活動中。自分の道を模索中

弁護士時代、外務省前で難民救済を訴えているところ

ニューヨーク大学修士課程の修了式の様子。隣は父親

渡米、そこでHRWと出会い東京オフィス開設のために32歳で帰国。今の主な仕事は三つあると言う。一つは国会議員や官僚に会って世界の現状を伝えそれに対して日本が何をできるのかを提案する。二つ目はメディアに世界の情報を報道してもらう。そして三つ目が、国内トップクラスのビジネスリーダーと交渉しフアンドレイズ(資金調達)を請う。募金の単位はなんと何百万、何千万。グローバルな活動に何千万単位の資金調達。あまりに華麗な仕事っぷりに思わず「すごい仕事ですね」ともらした私たちに「でもね、心は演歌調。誰かを助けたいっていう汗と涙の物語なんです(笑)」とこり。

NGOといえは農業指導だったり井戸掘りだったり、泥臭い仕事を連想しがち。でも土井さんはこう言う。「私たちがやっているのは、井戸を掘るより前の段階。住むところや自分の命も危うい人たちの救済なんです。彼らが井戸を作れるようになればひと安心ですよ。現状を知るために緊張状態が続く国に赴くこともありますし。表は華麗かもしれませんが、裏は本当に危険と隣り合わせなんです。強い意志があったからこそ、今まで続けてこられたんだと思います」

そんな土井さんには、26歳で結婚した同じ弁護士仲間の夫がいる。「家でも話題は国際問題。」という質問に「全然！ 休日は自由が丘をぶらぶらしたり、温泉に行ったり。普通です(笑)」

最後の質問、今後の夢について土井さんは「世界中の人権問題をすべて解決することです」と言い残し「今から議員の方と約束が」と颯爽と出かけていった。その後姿を見ていると、あまりにも大きすぎる「世界平和」という夢も、彼女なかなかなえてくれるかも？と思えてくる。柔和で気さくかつ強い意志を持つ土井さんは、同性から見てもほればほりするほどカッコイイ！

※フアンドレイズ……NGOが活動が続いていくために、スポンサーから資金を集める仕事、いわゆる資金調達